裸の人生

長浜市名誉市民・西田天香さん

裸の人生は美しい。人間社会における最も美しい生き方だろう。

「裸一貫・裸百貫」ということばがある。自分の裸体のほかには何の資本もないことを裸一貫といい、無一物でもたいそう価値のあることを裸百貫という。この言葉から、人を疑うことを知らず、無欲で無邪気に放浪の人生を生きた天才画家・故山下清さんを連想される人も多いだろう。現代において、若い人にも根強い人気の映画「男はつらいよ　寅次郎」の寅さんにもよく似た側面がある。

晩年の西田天香さん

火事の火元となってすべてを失った人が成功することを「火事太り」という。それは、裸一貫から財を成したことへの妬み、やっかみも含んだ比喩で、あまりいい言葉ではない。が、素直な人ほど愛される、と言われるように、「すまなんだ」「申し訳ない」とわびる心情と、覆いや飾りのない人柄こそ「信」であり「誠」であり、人生において最も大切なものである、ということを教えてくれている。

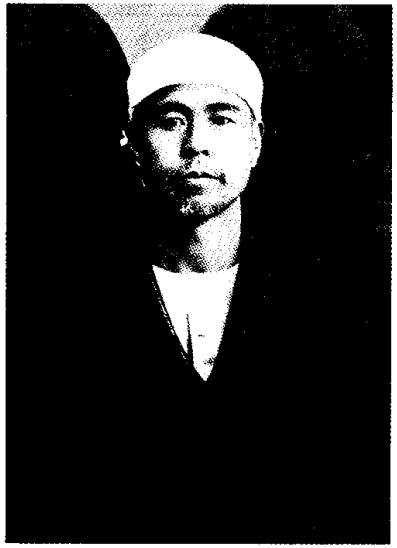
その裸一貫の人生を実践し、真理の道を極めた人が長浜にいた。西田天香さんその人である。明治五年長浜町片町に生まれ、北海道開拓事業の失敗を経て、「無一物中無尽蔵」という争いのない平和な社会の源泉を見つめ、懺悔奉仕の共同体・一燈園を禱立（創立）し、日本の思想界、宗教界、教育界に大きな影響を与えた人だった。戦後、国会議員（全国区選出参議院議員）、長浜市名誉市民（第一号）に推挙され、昭和四十三年に九十六歳で逝去された。一燈園では、逝去されることを「御帰光」と呼ばれている。裸の人生が没後も光を放ち続けるからである。

天香さんの裸の人生と、その契機は何だったのか。

天香さんの本名は「市太郎」。市太郎青年が二十歳のとき、長浜の資本家の出資を得て、百戸の小作農家を引率して北海道開拓事業に乗り出す。五百町歩の原野の開墾であったが、荒地、泥炭地、出水、濃霧、冷害、立ち枯れ、吹雪、搬出不能、厳冬と、極限の中での開拓生活で、事業はすぐに収入に結びつかない。

一方、長浜の出資者は元利の支払いを責め立てる。すぐに支払いのできるはずもない開拓民からも詰め寄られる。カネがすべての社会での人間同士の骨肉の争いの中で、苦悩と挫折の日々を過ごす。ついに、借入金の返済は不能となり、万策つき果て、すべての責任をとって北海道を去り、無一物で路頭の人となったのである。裸の人生の始まりである。

放浪生活の中でも、市太郎青年は、トルストイの「わが宗教」などあらゆる宗教書を読みあさり、禅を学び、「争わないで生きていくことができない限り、個人の生きる本当の道は見出せない」と実践の道を求めつづける。



◀托鉢姿の天香さん（大正11年）

▶苦悩の時代の天香さん（明治末期）

家もカネも持たない乞食（托鉢）生活で、奥さんからも離縁され、親戚からも相手にされない失意と苦悶の日々。やがて、舎那院愛染堂で三日三晩の断食に入り、四日目の朝、赤ん坊の泣き声を聞いて悟りをひらかれたのである。大悟とも霊覚を得たとも言われるその一瞬はどんなであったろう。

「無垢なあの赤ん坊の立場こそ、いちばん美しい生き方ではないか。生かされている。周囲を明るくしている。母親は乳を与えることで幸せを実感している。母と子の間に奪い合いはない。赤ん坊の存在のおかげで一家が喜びに包まれている。輝いている。赤ん坊が幸せの光を放っている。そうだ、赤ん坊になりきることだ」。

市太郎青年三十一歳。その一瞬は、まばゆいばかりの光を浴び、人や花や鳥や森羅万象のすべてのはからいで、自分が蓮の花の上にいるような境地になられたのではないか。自我への執着に悶々としてきた自分から開放され、全身の力が抜けて『無一物こそ無尽蔵の喜びが湧く泉』と、人格の光化を体感された一瞬ではなかったか。

のちに天香と改名された市太郎青年の求道の人生（懺悔奉仕の慈悲の生活＝裸の人生）は、ここからはじまった。この発心の真理を行じていくために、便所を掃除し、自分と周囲を清めていく「行願」と、無報酬で何事の奉仕もする「路頭」と呼ばれる修行の方法があみ出された。いずれも下坐の行である。

「下坐に身を置けばすべてを超越でき、全体が見える」という。無欲、無心の懺悔奉仕の生活は、全国民の共感を得、天香さんの求道の生き方に共鳴する人たちによって一燈園が創立された。大正二年、天香さん四十一歳の年であった。やがて、一燈園（財団法人・光泉林）には、幼稚園から大学まで（燈影学園）が整備されていく。

懺悔の生活は、人を磨き、人を清め、幾多の人材を育て、社会の一隅を照らし続けてきた。願行に生きた天香さんの話は、ひと言ひと言が宝石のようである。

・自分のみが正しいと思う処から争いが始まる。

・自分の長所に執われていると、人を傷つけていることに気がつかぬものである。

・生きがいは他に求めて得られるものではない。他のために尽くして得られるものである。

・批判する人は多いが、実践する人は少ない。

・思うのみで立ち直らぬ集積を難局という。

・逃げれば逃げるほど失敗は大きくなる。

・金の力で仕事をしている人は金がなくなったら無能者となる。

・利益を超えた仕事の中に本当の利益がある。

・信用は自分を無くした真心からしか生まれない。

・自分の受持ちの仕事に打ち込んで魂をみがくことが本当の学問である。

「無一物中無尽蔵」裸の人生に「合掌」。

（国友伊知郎）

子ども相撲と金太郎伝説

湖北の各地に伝わる奉納相撲

国技といわれる相撲の歴史は古い。神話のなかにも、相撲らしきものが出てくるし、平安時代から鎌倉時代にかけて、七夕の頃に宮中で「相撲の節会」という相撲の天覧試合が行われていたようだ。それが神事と結びつき、神前に奉納される芸能のひとつとして、庶民に広まっていったのだろう。

湖北では村祭りの余興として、奉納相撲が各地で行われている。近江町にある日撫神社の角力踊りは、毎年、季節の話題として新聞で紹介され、よく知られている。ところが、湖北と相撲との関わりを何人かの人に尋ねると、その外にもずいぶんあることがわかった。近江町能登瀬の天津照神社や山東町志賀谷の志賀神社では、いまでも集落をあげて行われている。長浜市本庄町の芦柄神社や湖北町速水の伊豆神社、浅井町内保の八幡神社、余呉町中之郷の鉛練比古神社などにもあるという。

「相撲の節会」が宮中行事のひとつだった頃、相撲は、スマイと読んだ。力士のことを相撲人といって、全国各地の力持ちが都からスカウトされた。そういえば、長浜市の相撲町も浅井町の相撲庭もスマイと読む。とにかく、湖北は相撲と深いつながりがありそうなのだ。

湖北の相撲は後鳥羽上皇行幸から

「天津照神社の相撲は、いつ頃から行われているんですか」

近江町役場に勤める宮司の細野欽也さんを訪ねてみた。天津照神社は延喜式内の古社で、古代の豪族息長氏を祀るところだから、日本史の標本みたいな社だ。

「後鳥羽上皇が行幸なさったときにね、上皇が相撲が好きだったもんだから、村人たちが相撲をご覧にいれた。それが始まりやと言われてるね」

後鳥羽上皇は、鎌倉初期に横山の麓にある名超寺の僧を頼って行幸したという伝承がある。執権北条氏を討つために、湖北の南部を回り、密かに兵を募ったという。

「倒幕のために湖北にやってきたのに、相撲を楽しむ余裕があったんでしょうか」

▲日撫神社の角力踊り（近江町・顔戸）

「よっぽど好きやったんやな」

「八百年近く前の話か。よく続いてきたもんですね」

「まあ何ちゅうても、戦前までは最大の娯楽やったな。わしらの若い頃でも、岐阜や北陸から力自慢が集まってきたからね」

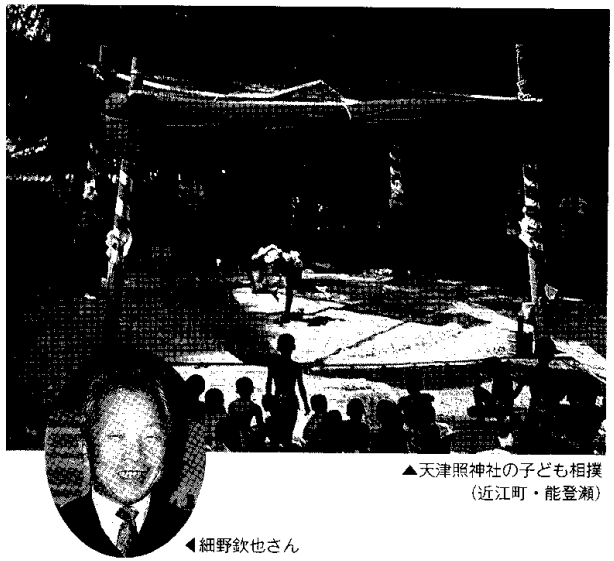
「褒賞が多かったからでしょうか」

「それもあるな。湖北は豊かな土地やから、褒賞もぎょうさん出たんやろ」

「いまは子ども相撲だけですね」

「子ども相撲だけになったのは、最近のことや。いまは大人は忙しくて、神様を楽しませる余裕もないんやな」

実は、そのあと訪ねた近江町顔戸の日撫神社と長浜市本庄町の芦柄神社にも、ほとんど同じ伝承が残っているのだ。その伝承がほんとうだとすると、後鳥羽上皇は、横山の麓の神社を巡って、相撲見物に明け暮れたようだ。戦いよりも相撲のほうに興味があったとしか思えない。事実、承久の変では、鎌倉の執権北条氏にこてんぱんにやられてしまう。



▲天津照神社の子ども相撲（近江町・能登瀬）

◀細野欽也さん

金太郎伝説とも深くつながる相撲

その辺りを長浜市本庄町の柿木文男さんにうかがってみた。

「昔は、相撲も武芸のひとつやったからな。強い兵を見つけるのも、相撲見物の目的やったかもしれんぞ」

「なるほど。柿木さんも、若い頃は雷電と異名をとるほど、相撲が強かったそうですね」

「わしは、うるし山や。さわっただけで敗けるというやつやな。ワッハッハ」

「なぜ、この辺りで相撲が盛んだったのですかね」

「足柄山の金太郎さんと関係があるかもしれんな」

長浜市から近江町にかけての横山一帯に、金太郎の伝説があることは聞いていた。たしかに、坂田金時の姓と坂田郡とは同じ名だ。足柄山と名づけられた山もあるし、近くの七条町や八条町にも足柄神社がある。本庄町の芦柄神社は、明治の初めまで足柄神社と書いたそうだ。しかし、金太郎伝説は、神奈川県の南足柄市や静岡県小山町のほうが有名だ。南足柄市の金時神社では、子供の日に金太郎をしのんで相撲大会も行われるという。

湖北の金太郎は、いまのところ少し分が悪いが、とにかく『西黒田風土記』には、坂田金時の話がくわしい。

『金太郎は、横山の麓、布勢郷に生まれ、山のなかで山姥に育てられた。熊と相撲をとるほどの怪童で、長じて息長氏の刀匠のもとで働いていた。天廷四年（九七六）、ここへ都に上洛する源頼光が通りかかり、金太郎の非凡な相形を認めて、家来として召し抱えた。その後は、頼光四天王のひとりとして、数々の手柄を立てた。伊吹山の群盗征伐の際には、地元の地形をよく知っていたので、一番乗りの大手柄を立てたという』

金太郎は伊吹山の悪党退治もした

「伊吹山の群盗征伐」というのは、酒呑童子の退治をいうのだろう。酒呑童子の話は、丹波の大江山が有名だが、伊吹山にも同様の物語がある。室町期の『酒伝童子絵巻』では、伊吹山が酒呑童子の舞台になっている。

お伽草子の『伊吹童子』にも、伊吹山と酒呑童子のことが出てくる。だが、こちらの話は少し違う。

『昔、伊吹の弥三郎という怪物がいて、大